

# ほうきさん

## 2014年

## 9月



棕本673 存仁寺

いつしか蝉の声も聞こえなくなり、コオロギなど秋の虫たちの声が響いてきます。今年は蝉の声もいつもの年よりは少なかつたように思えます。雨が多い夏でした。そして、また災害が生じ尊い生命が犠牲になりました。心が痛みます。

一日も生活のリズムが戻るよう念じつつ義援金などできる」とをさせていただきたいと思います。さて、今年は終戦から七十回忌の年に当たりました。何もかも失われた時代から経済、文化、生活、豊かさにあふれる社会が形成されました。しかし、いま

は戦後でしょうか?「秘密保護法」「集団的自衛権」「憲法九条」の問題、ウクライナ、イラクなど世界での戦争の火種が撒き散らされるような憂いなど、いつ戦争が起くるとも限らない

ような情勢になりつつあります。どうか、今が「戦前」と呼ぶことのないように思いを持ち続けたいものです。八月靖国神社に官僚が参拝することの是非。お国のために命を捨てて戦った方々を祀る、顕彰することがなぜいけないのか?もちろん政教

分離や特定の宗教、アジアの国々に配慮云々という意見もあるでしようが、根本を見失わないようにしたいことです。それは、「いのちを英靈として祀る」とこと、「祀るいのちと祀らぬいのち」があることです。空襲で、原爆で亡くなつた方々、また、集団自決に追い込まれた方々など、同じ戦争犠牲になつた多くは祀られていません。

いのちに差異をつけてよいのでしょうか。お念仏は「讀嘆であり」とあります。お念仏は「讀嘆であり 懺悔である」とあります。お念仏は「讀嘆であり 懺悔である」とあります。

懺悔である

讀嘆であり

「金子大榮」

— 仏 智 無 辺 —



を歩み、この世の縁が尽きるとき淨土に生れて仏となり、迷いの世に還つて人々を教化する」と親鸞聖人が顕された、往生淨土のいのちであります。仏に出遇うことは無明のわが身が知らされて、顧みながら「懺悔」とそのわが身そのまま慈悲に救われ摂(おさ)めとられていることを味わう「歓喜」の人生を歩ませていただきたいです。仏に遇うことは私の生き方が問われることでしよう。今年も、初盆を迎える十六日灯籠送り・歓喜会法要を勤めさせていただきました。お淨土にご往生され、今仏と成られ私たちを照育下さる方々のはたらきを改めて味わいつつお互い念仏申す日々、聞法に問う日暮をこれからも務めさせていただきましょう。

住職

「お念仏は 讀嘆であり 懺悔である」

「懺悔」は今日では

「ざんげ」と読み「罪を悔い改めて許しを乞うこと」を意味します。漢訳仏典の中でも同じ意味の文脈で使われます。私たちが罪を悔い改めて許しを乞うためには罪を罪と自覚しなければなりません。凡夫である私たちは自分の罪を認めようとはせず、むしろ、他者のせいにします。これが自己中心にしかものを見ることのできない我執の姿です。そんな私たちは自らの力で自己の罪を自覚することは到底できないのです。親鸞聖人は自らを「罪惡深重」とか「地獄一定」といわれていますがそれは阿弥陀如来の本願に出遇い、その智慧に照らされ、はじめて知らされた自らのあり様と姿でした。私を照らすその罪を知らしめる阿弥陀如来の智慧は、そのまま大慈悲と一体のものであり、罪惡深重の身をそのまま認めて、摂め取つて捨てないはたらき(摂取不捨)に他なりません。実は仏教の「懺悔」の原語である「クシヤマ」は「広いこころで許すこと」「思いやりの深いこと」を意味します。つまり「懺悔」とは智慧と慈悲が一体となつた阿弥陀如来のはたらきです。お念仏は、阿弥陀如来があらゆるいのちそのものを認めて許し、讀嘆するはたらきなのです。

